



1 大きな口を開けた処分機。犬たちはこの中で殺処分される。2 犬たちを処分機へと追い込むための細長い通路。3 収容された子猫。離乳前の子猫は24時間体制で世話が必要であることなどから、ほとんどが殺処分される。4 ある愛護センターの敷地内に建立されている動物たちのための慰霊碑。毎年1回、慰霊祭が行われる。

奪われるために
生まれる命 
犬と猫の殺処分を減らす

殺処分という 現実

「犬と猫が殺処分されている」という事実は知っていても、
私たちはそれが別世界での出来事のように錯覚しがちです。
この問題を考えるためには、まず殺処分という現実を直視
しなければなりません。

すべての犬が箱に入ると、箱の扉が閉まり、炭酸ガスが注入される。ゆっくりと酸素濃度が下がっていく中、犬たちは苦しい鳴き声を上げ、床を爪でカリカリとかき、悶え苦しみながら5分ほどで窒息死する。まだ温かい犬たちは、そのまま焼却炉へと落とされ、灰となる。

猫の場合はまた事情が違う。このセンターに持ち込まれる猫の数は犬の約3倍で、そのほとんどは子猫だ。猫は、各保健所などから車に乗せられてやって来る。段ボールに入った猫もいるが、麻袋などに詰め込まれた状態の猫も多い。多くは収容所を経由することなく、そのままの状態で「簡易処分機」(3ページ写真)と呼ばれる鉄の箱に入れられ、炭酸ガスにより窒息死する。

猫は呼吸が浅いため、死ぬまでに犬よりも時間がかかることが多いという。中には重さで圧死する猫もいるようだ。そして犬と同様、焼却炉に入れられ、灰となる。

安楽死とはほど遠い殺処分の現場。しかし、殺処分する施設を批判して解決する問題ではない。考えなければならぬのは、このような殺処分を行わざるを得ない理由だ。